

日本基督教団 東中国教区ニュース



東中国教区
教区ニュース誌委員会
〒700-0005
倉敷市鶴形一五五
倉敷キリスト会館内
TEL 086-422-1780

イースターメッセージ

隠退教師 延藤好英

「イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、『主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください』と言った。」

(ルカによる福音書十一章一節)



イエス・キリストの復活おめでとうございます。しかし振り返ってみると、イエスさまが

十字架にかかれた時、ペトロをはじめ弟子たちは皆、イエスさまを見捨てたのです。そのイエスさまが復活されたのです。弟子たちからすれば、「会わす顔がない」思いだったのではなかったでしょうか。けれども、恥じる心よりも、イエスさまの復活を喜ぶ思いの方が勝ちました。イエスさ

まを失った後、ティベリアス湖で漁をしていたペトロたちに、復活されたイエスさまが姿を現されました。その時、ペトロは湖に飛び込んだのです(ヨハネによる福音書二十一章七節)。イエスさまのところに少しでも早く行きたかったのでしょうか。そして、イエスさまの方でも「さあ、来て、朝の食事をしなさい」(同十二節)と言われたのでした。なんと嬉しい朝食でしょう。復活の喜びは、今日を生きているわたしたちの喜びでもあります。イエスさまが「わたしに従いなさい」(同十九節)と、わたしたちを招き、共に生きてくださることへの喜びです。

神さまはわたしたちと心を通わせることを望んでおられます。祈りへの招きです。今日の聖書箇所は、イエスさまが弟子たちに「主の祈り」を教えてくださいました場面です。まずイエスさまが祈っておられました。弟子たちはイエスさまの祈りを見て、自分たちとは違うものを感じたのではないのでしょうか。祈る前と後で、イエスさまの輝きが変わっている、そんな驚きを感じた

目次

「イースターメッセージ」	1
「第二回宣教会議報告」	2
「青年の集い」	3
「お聞かせください、地区の声」	4
「二・一」平和集会報告	5
「教師研修会報告」	6
「按手礼式報告・退任の挨拶」	7
「礼拝音楽の集い・編集後記」	8

のではないのでしょうか。「自分もそんな祈りをしたい」、そんな憧れを抱いたのではないのでしょうか。それで、「わたしたちにも祈りを教えてください」とお願いしたのでしょうか。イエスさまは、祈り方を教えてくださいました。弟子たちが驚いたに違いないのが、神さまへの呼びかけの言葉です。「父よ」です。この言葉は、アラム語の「アツバ」が使われています。それは、幼子が、信頼を込めて父親に呼びかける「お父ちゃん」といった意味の言葉です。「お父ちゃん」だなんて……。でもイエスさまはそう教えられたのです。あなたも、そう神さまに呼びかけてみませんか。



憩いの家レモンハウス

「第二回宣教会議報告」

東中国教区副議長 中井大介

第二回宣教会議が去る二月三日（月）

オンラインで開催されました。主たる議題は①各部各地区報告、②教区将来宣教について、③次年度予算検討における懇談でしたが、今回は主として「②教区将来宣教について」で取り扱われた協議の内容を中心に報告いたします。

教区総会においては当該議案において「宣教研究を担う部署の設置」が課題に挙げられています。現在の教区機構には、この機能を担う部署はありません。第七十一回教区総会以来、構成メンバーが教区の地区長からなる教会強化特別資金運用特設委員会が稼働しはじめ、現在は小岩輝委員長のもと定期的な委員会開催によって教区に各地区の詳細な宣教状況が共有されるようになってきました。小岩委員長はそこで、各教会や各地区には個別の課題がありつつも、それらを個別に解決していくだけではなく、それらを総合してもっと大きな課題として捉えていく必要性があると語られます。

した。折しも教区内の地区長が互いのつながりと理解を深めるうちに、これらの課題を背負う私たちは、何をしているのか？」が問われ、やがて、私たちは折りが良くても悪くても「主を宣べ伝える」者である、との認識を再発見していきます。地域の人々に、どうやって主を宣べ伝えるのかを自らが明確に認識すべきであり、私たちがノンクリスチャンである地域の方々からどのように見られているかも知るべきではないだろうか、との問題提起がなされました。

教団においても、教区・教会においても、自分自身の活動の存続が不安の第一要素となってしまう、どうしても内向きな議論にとどまってしまっている現状があります。それと同時に、教会の外の世界には、この混沌とした時代においてキリスト教信仰に興味をもち、期待をし、同時に存在感の薄さゆえに歯がゆさや諦めや無力さを思



う人々の存在があります。私たちは、時代の要請に応えられる社会性を備えられているだろうか、との問いかけがなされています。そうした語らいの中で、このたびの宣教会議に参加された方々からも、公に喧伝しようと思ったことはなかったが、ある教会では月に一度は近隣の公園の清掃を行い地域の方々にも教会のご奉仕があると認知されていることや、暮らしに困難をもつ方々の継続的な支援をしたり、同じ苦しみをもつ方々が安心して何でも語り合える場をカフェとして設置したりと、それぞれがキリスト教精神に生きた奉仕をされていることが共有されました。また、歴史を紐解くと、キリスト教が世の人々の信頼を得てきた出来事として、死者を丁寧に弔い、ひとりで生きていくことが困難な人々への援助をいつも行ってきたことがあります。キリスト教会は、いつでも、誰でもいつでも受け入れてきた、歓迎してきた、手当てしてきたという実績があるから、ノンクリスチャンの多い世界においても信頼されてきたというのです。さらにいえば、その信頼は陰日向に「主が宣べ伝えられ」ていたから醸成されたものに他ならないので

す。そこから敷衍すれば、現代においても、私たちは仮に特別な奉仕ができなくても、教会や礼拝堂がいつも開放されており、いつでも誰かの居場所になれるという姿勢をつくり続けていくことも大切な奉仕と見做せるのです。会議の中で玉島教会の高津先生は「大きな目論見として戦争を止めたい。戦争を止めるヒントが教会にはある」と断言されました。戦争を止めるといふ世紀の事業の探求を、私たちは常に信仰の旅路において深掘りし続けなくてはならないのです、現代においては特に。

鳥取県と岡山県にまたがる教区の教会につながる私たちは、人が来るまで待ち続けていてはならないのです。ひとつの喩えとして、あるところに鐘の鳴る教会があるとします。この教会では毎日決まった時間に鐘が鳴り響きます。教会の鐘は、教会がある限り鳴り響きますが、地域においてこの鐘の音を聞く人は鐘の鳴る教会に意識を集中して聞くわけではありません。しかし、自分たちの暮らしの中に鐘の音が響き渡るとき、今日も教会から鐘の音が聞こえてくる、何とは無しに聞こえてくる、教会の存在は意識にのぼらなくとも日常に確実に

染み渡っており、そこに平和の源泉がある。確かに教会は今日も私たちの暮らしの一部にあり、そこでは神の愛について真剣に語り合われ、愛の業の実践に勤しむ人々が集まっています。それが私たちです。

東中国教区には、語らい合えるつながりがある、ということを教会強化特別資金特設委員会の方々が再発見しました。また、常置委員会においても宣教部委員会の始動が進められ、宣教部（教育・社会・伝道）の各委員長と、オブザーバーとしての教師部委員長・財務部委員長による会議が行われるようになり、教区機構を横断した情報共有の場が育ちつつあります。いみじくも宣教部委員会は「つぶやき広場」とあだ名されて、課題の共有がなされ、つながりの豊かな一側面を担いはじめています。東中国教区は、こうしたつながりを基として、宣教の使命を確認していきたくと願うのです。少子高齢化と暮らしの疲弊は確かに深刻です、しかし、同時に私たちは孤独ではありません。このたびの宣教会議においては、待つ宣教ではなく「出て行く宣教、出会っていく宣教」が求められているとの発言もなされました。世の人々に、私たち

が確信した真理を明確に、言葉と行いによって宣べ伝えていきたいと思えるような教区形成の機運が育ちつつあります。

「青年の集い」

宣教部教育委員会 三浦きょうこ

宣教部教育委員会では、三月三日（月）～四日（火）、八月より延期となっていた「青年の集い」の内容は変えず、新庄村で行いました。当初雨模様でしたが（時に雪）散策時は雨も降らず、残雪の中散歩を楽しみました。テーマの中心はもちろん神様ですが、それを語ってくれるのは「自然」です。日頃固く閉じた心も柔らかくなって、自然と一体になるといろいろなことが起きるのです。臼井崇来さんの海外での想像も出来ない経験や森本潤太さんの森での語らいなど、大好評に付き第二回を五月三十日（金）～三十一日（土）に開催予定です。募集対象は十八歳～四十代の方、ふるってご参加下さい。（〆切りは五月十九日（月）です。）

「お聞かせください、地区の声」

今回は「岡山県西部地区」です！

岡山県西部地区長 高津 俊

教区内諸教会の皆様にはお祈りに覚えてくださりご声援をいただき感謝しております。皆様の地区においても困難な時代を耐え忍んでおられることを思います。

岡山県西部地区には六つの教会があり、二〇二五年三月現在、牧師三人（うち二人は玉島教会の主任及び担任）です。現在、井原、高屋、笠岡の三教会が無牧師であり、玉島教会の牧師二人がそれぞれ代務を担っています。鴨方教会はマビ・マカリオイ教会の牧師が兼務しています。各教会の礼拝出席者数は一桁か多くても十数人の規模で、減少傾向は止まりません。各教会がそれぞれ牧師を招聘することはもはや難しく、貯えから費用を捻出できる年限での招聘を決断した教会もあります（二〇二五年四月、笠岡教会に牧師が着任することを喜びをもって報告いたします）。

将来に繋げる岡山県西部地区の宣教に備

えて今やるべきことは、地区内の教会が実際に顔を合わせた交わりを積み重ねることと考えています。牧師が同席できない状態でも主日の礼拝を維持するために導入したオンライン中継に隣席のリアリティを感じ、そのためであり、それぞれの教会のメンバーが現状に直接触れてキリストの体である教会の痛みを自分の痛みとして受け取るためでもあります。実際に会って交流した人同士ならモニター画面越しでも親近感と臨場感を持つことができると考えています。牧師が掛け持ちで午前と午後に地区内の教会を駆け回るにも限度がありますし、復活の記念日である日曜日の朝という意義深い時刻を大切にしたいですから、オンライン中継は大きな助けとなっています。また、会堂の維持管理にも限界がありますので、将来の宣教を見据えた財務計画を検討することにも目を向けなければならぬでしょう。

しかしそれでも、人間の思いを超える御計画に希望を抱き、小さくても堅実な歩みを進めることにも励みたいと思います。将来について悲観的になって諦めるのではな

くて、主の栄光を証しする器として賜物を教会が持ち寄り活用し、各教会の課題を一緒に担って喜びも重荷も分かち合うことを通して、一つのキリストの体であることを実感できます。喜ぶものの共に喜び、泣くものと共に泣くことの実践のひとつになると思います。

二〇二五年度の岡山西部地区は、一堂に会しての合同礼拝をはじめとして、共同で行う宣教の実践を模索したいと考えています。



ウェブ配信での礼拝中継の様子

「二・一一平和集会報告」

(二〇二五年二月十一日、
岡山バプテスト教会にて開催)

玉島教会牧師 高津 俊

池住義憲氏を招いて『キリスト者として
平和を創る』と題する講演を聴きました。

池住義憲氏は、自衛隊のイラク派兵差し
止め訴訟を名古屋地裁および高裁で訴え、
二〇〇八年に高裁で請求の棄却という判決
を受けられました。しかし、その判決文に
は自衛隊のイラク派兵は憲法違反であると
記されたことで画期的な判例となりました。
この判決は翌年の岡山における同訴訟
の判決でも支持されました。

戦争の被害状況が報道されるとき、犠牲
者の人数が伝えられますが、その数値を無
機質なものと受け取りがちです。しかし、
それは人間の死の数であり、背後に家族・
友人・隣人がいます。減った増えたと一喜
一憂するものではないと気付かれてからの
池住氏はイラク派兵差し止め訴訟にさら
に力が入ったそうです。

基本的な人権として平和に生存する権利を
求めることを続けるため、また、最近の無
関心な風潮をなんとかしたいとの思いで、
脑梗塞から復帰したお体を押して岡山に
来られたとのことでした。

憲法に拠って立つとは、憲法に基づいて
政府に対して私達は交戦権を認めない、と
はっきり言うことであり、それは不断の努
力で憲法を守っていく私達の義務です。

オランダのオックスファム・ノビブとい
う NGO には「あなたにも創れる平和の
百箇条、社会を変えられる百箇条」があり、
その第一番目に「無力感を克服する」とあ
るそうです。平和を創るための力を私は持
たないからといって行動しない、できない
のは無力感に阻まれているからであり、こ
れを克服することから平和創りが始まると
います。

そこで行き着いたのが「ジャストピー
ス」、公正で正義の平和を求めること、他
者の苦しみの上に成り立つ安定や幸せは
「ジャストピース」ではないとのこと
です。平和という文字のなりたちを考えて
も、平は等しいこと、和は穀物を食べる口

と考えるならば、すべての人が等しく食
べるのできる状況、関係、制度、システ
ム、社会、つまり「ジャストピース」の状
態とのことでした。

現在八十歳の池住氏は、あと二十年は生
きて伝える意思をお持ちです。もし生きて
いるうちに願っていることが実現しなかつ
たとしても、次の世代にバトンタッチすれ
ばよいとのことでした。

ある教会に腕のないキリストが描かれた
絵画が掲げられていて、描かれていない腕
は私達一人ひとりだということです。平和を
創って生きるとは、キリストの腕としてで
きることをしながら生きること、キリスト
教以外の、仏教もヒンドゥー教もイスラム
教も他の宗教も、意味の差異はあるとして
も平和を求める願いはある、と結ばれまし
た。

集会に参加した方からは「勇気をもらっ
た」「元気をいただいた」「平和への熱心な
態度に心を動かされた」「自分にもなにか
できるかもしれない」と好評でした。

なお、参加者は会場に四二名、オンライ
ン参加十五名、合計五七名でした。

「教師研修会報告」

「旧約聖書の知恵と現代」

教師部委員会 委員長 宮本裕子

二〇二五年三月一日（土）午後一時から三時半まで、「東中国教区教師部主催研修会」が、倉敷教会において開催された。今年の研修会は、教師と信徒併せて、十一教会二十名の参加者であった。講師は飯謙先生（神戸女学院院長）、テーマは「旧約聖書の知恵と現代」知恵文学のキーワードを考える」であった。講演は「箴言」「ヨブ記」「コヘレトの言葉」から、古代ユダヤの「知恵」とは何かを、知恵文学から解説された。「一般に古代イスラエルの信仰は、アブ



ラハムへの土地付与の約束、エジプト移住と脱出、荒野の放浪、約束の地への定住という歴史に示された神の導きと、その応答としての律法遵守とまとめられるが、旧約聖書には、その歴史とは無関係に信仰を展開する『知恵』と呼ばれる伝統があった。」レジメより。

「ヨブ記」から一例を挙げると、ヨブと三人の友との会話は、最初は一般論で因果応報を語っているが、次第にヨブへの個人攻撃に変わっていく。最後三十八章からは、ついに、「主」がつむじ風の中から登場し、人が造られた目的は「互いに愛し合うこと」とこれを教えるのである。実は「箴言」も「コヘレト」も、最終的には「互いに愛し合う」ことを教えているものである。「隣人愛」を知ることが、「知恵」なのだ、ということである。

飯謙先生の優しい解説、飾らない語り口、ユーモアあふれる話し方に魅了され、更に、長年の聖書研究に基づいた深い洞察から導かれる旧約聖書の「知恵の書」の読み解きは、新鮮で、興味深く、面白く、二時間近くの講演があつという間に感じられるものだった。

講演後、会議室に移動し、茶話会が持たれた。おいしいコーヒーと藤戸饅頭をいただきながら、飯先生の若い時の興味深いエピソードや、聖書翻訳（共同訳）について

の苦労談をお聞きした。活発な質疑応答がなされ、参加した者たちは、旧約知恵文学についての深い学びの時間が与えられたことだろう。今回の研修会は、土曜日午後だったが、次回は平日に開催し、もっと多くの教師たちが参加できることを願っている。最後に、ご参加くださった皆様、奏楽してくださった姉妹、また、茶話会をご準備くださった倉敷教会の皆様にも、心より感謝いたします。



「按手礼式報告・退任の挨拶」

「按手礼式」報告

旭東教会 牧師 森 言一郎

岡山県東部地区で三年間ご一緒してきた蕃山町教会の加藤隆先生の按手礼式が、十二月二日（月）服部修議長長の司式により蕃山町教会で執り行われました。東中国教区を愛して止まないことを公言される加藤先生です。礼拝堂は温かな思いと祈りの霊を感じる、よき緊張感に包まれました。東中国教区を越えての喜びがあることを知らされたことがあります。最前列に着席されていたのは旧知の西東京教区狛江教会の岩田昌路牧師でした。加藤先生によると、道に迷いながら研鑽を積んでおられた神学生時代にご指導下さった方とのこと。一人の牧師の誕生の背後にあるさらに大きな物語を想いました。



按手礼式の様子

「退任の挨拶」

「これからもしょろしくお願いします」

蕃山町教会 牧師 加藤 隆



神学校を卒業して、右も左もわからない状態の自分をあたたく迎えてくださり、交わりを

もってくださいましたこと、心から感謝いたします。様々な集会でご一緒させていただきましたみなさま、ほんとうにありがとうございました。

岡山に遣わされて三年過ぎしていく中で東中国教区の教会に仕えていく召しが与えられ、神さまの導きによって、これから教区の教会に仕えるものとしての道が備えられました。感謝です。新年度、新たな教会での働きに喜びと希望をもって神さまと、またみなさまと共に歩んでまいりたいと願います。

「退任の挨拶」

「とある若さより」

岡山教会 伝道師 佐々木 玲也

どこことは申しませんが、多くのところで若いと持て囃されます。けれども、若いというのは一つの区別に過ぎません。その人はその人です。分け隔てのないお付き合いが世相的にも求められてきています。とりわけこの教区では年を理由にできなくなっております。

さて、東中国教区では、とかくコロナ禍での赴任であったために、私にできたことは専ら自らの教会である岡山教会のことだけでありました。ですから、若気の至りばかりでご迷惑をおかけいたしました。お支えいただきましてありがとうございます。



東中国教区「青年の集い」の朝食にて

礼拝音楽の集い

(二〇二四年九月十六日(月)、笠岡教会にて
講師に中村証二さんを招いて開催。)

「礼拝音楽の集いに参加して」

旭東教会 古宮 久美

私が奏楽者として歩み始めた当初は、ただ大きなオルガンが弾けることや、会堂に響く音が素敵だったこと、献金や前奏後奏を自由に選べるのが楽しかったりで、礼拝全体のことにについて深く考えることもなく、十年以上過ぎました。奏楽は大事な仕事だということはわかっていたつもりですが、とりあえず間違わずに弾くこと、みんなが歌う邪魔をしないように気を付けよう、ぐらいしか考えていませんでした。

今回のような奏楽の学びの場や、奏楽者の心構え、礼拝そのものについてまとまった形で学ぶ機会はこれまでほぼなく、この度、礼拝音楽について、奏楽について、本格的に学べたことは、私にとって本当に大きな収穫でした。

今回聞いたお話のなかで、特に印象的だったのは、奏楽する曲を練習するとき、自分でも何度か歌詞を味わい、歌ってみてから弾かなければならない、ということ。会衆が息継ぎしやすい速さや間を

考え、重要と思う歌詞の部分をしつかり意識して弾くことで、より会衆に寄り添った奏楽となるということでした。

私の教会は電子オルガンで、音量を演奏途中で変えることもあまりしないし、タッチの違いもそんなにないし、そこまで変化が出るかなあと思いつながら、自分の奏楽担当の日に、教えていただいたことをさっそく実践してみたところ、牧師から「今日は歌いやすかった！いつもと全然違ってた！」と言っていたきました。弾いている本人でも何が違うかわからないようなことなのに、オルガンの弾き方の違いに気づいていただいて、むしろ私のほうが驚き、確実な手ごたえを感じました。

中村先生から、「奏楽者をひとことで表すなら、年齢も音楽的能力もバラバラな即席合唱団の指揮者である」と教えていただきました。私の教会は、年齢はバラバラですが、皆さん音楽的能力も高く、賛美の音量も大きく、時にオルガンが皆さんの声量に負けそうになることもあるぐらいです。

これから教会員の皆さんの賛美を、息と心を合わせ、安心して歌えるようしっかりと支えられる奏楽ができるよう、奏楽の腕も磨き、奏楽のこと、賛美についてもっと勉強し、自分自身の信仰を奏楽を通じて深めていきたいと思っています。

編集後記

教区内の様々な活動が再開され、こうして誌面でお伝えすることができると喜びを主に感謝いたします。皆様の上に恵みあふれるイースターの時が備えられ、主の復活の喜びで満たされますように(W)



★ハラスメント相談窓口★

毎月第三水曜日 午前九時～午後九時
電話番号 〇九〇ー一三三三〇ー八七三〇
イイミミット ハナソウ